深霜

自影生

赤う濡れてそこら光のあたたかさいま深霜に陽ぞ映にのぼる
深霜に立つこと知れど知らず居り陽はあかあかと映にて來しかも
なまなまと嗅ぎいたしだる血のにほひ陽は深霜に映に徹りたれ
身にたぎつ力消ゆくとさむざむしかげる朝日を見て立ちしかも
夕祈念の母のかたへに座し居ればいのち愛しうなりて來しかも
暮の佛間灯のつくけはひ洩れいづる母の題目を待つこゝろかも
はゝそはの母いつしんにおろがめば佛身が家ぬちを這ひまはる也
母と棲めばこゝろ安しも鐵瓶は今宵もふつふつ沸りてゐたれ
朝市場うらら朝日にうちひたり人間のごよみの靜かなりけり
朝市場陽はうらうらに照りわたり生活のごよみ見るによろしも